

生存科学研究 ニュース

VOL. 8. NO. 6 . 1993. 11. 10. 発行

発行：財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル 303

電話 03-3563-3518

生存科学研究所

西日本シンポジウム'93

21世紀の健康都市大阪を目指して
—都市化への健康政策—II.

10月13日(水)午後2時より、生存科学研究所主催、大阪府医師会、大阪府、大阪市後援、の「西日本シンポジウム'93」が前年度に引き続き表記のテーマで、大阪府医師会館大ホールにおいて開催された。

先ず、開会の辞では生存科学研究所山口正民理事が挨拶をして、生存研の実践的な研究と具体的な健康問題に取り組む西日本シンポとを紹介した。

講演第1席は、筑波大学名誉教授、大阪府立公衆衛生研究所所長小町喜男氏が「健康と環境」と題し、平均寿命の年次推移の大阪と他都市との比較等、具体的データを示しながら以下のように講演した。

現在の日本の政策は経済偏重で、人間の命の大切さを忘れていてのではない。健康は偶然にあるのではない。その背景には過去・現在・未来とつながる歴史・環境がある。昭和40年代と現在とではリスクファクターも異なる。それへの対策として食生活・勤労・生きがい等の多面的な配慮が必要だが、個人的のみならずコミュニティー・レベルでの対策が重要である。また、とって付けたような

健康活動より、生活をとおして健康を保つことが重要で、それでこそ幸せもありうる。

講演第2席は、大阪大学医学部教授(公衆衛生学)多田羅浩三氏が「大阪市における健康の現状と展望」と題して講演。まず都市の不衛生と公衆衛生を説明した後、大阪各所の生活環境・経済状態・生活スタイル等の衛生指標と各種疾病死亡率の関係、検診受診率と入院日数の関係等、多数の示唆に富むスライドを示しながら、健康のためには、地域固有の対策、公衆衛生とプライマリケアの連携、行政の枠を取り払った対応等が必要であり、高齢化社会における寝たきり患者の増大への対策が課題であると強調した。

講演第3席は、神戸市立中央市民病院循環器センター内科部長吉川純一氏が、「長寿社会の循環器疾患」と題して、心筋梗塞等以前から多い疾患ではなく大動脈瘤、大動脈解離、弁の硬化による弁膜症等、高齢化社会で増加しつつある重点疾患について解説、医療費の高騰に直面するであろう医療の近未来について述べた。

会員研究会「生存と経済」第7回
日本文化と生存科学の対話
—日本文化は地球を救えるか—

10月14日(木)午後2時より、帝京大学経済学部江見康一教授が上記のテーマで発

表した。

生存科学の真髓と日本文化の真髓とはどこかで繋がるのではないか。文化とは、人間と自然との関わり方として編み出された英知の集積である。文化は土地・時代に固有で、他に転移できないが、文明は物・技術との関わりであり転移できる。文明は文化の発達したものとは言い切れない。生存科学は生命科学と環境科学のインテグレートしたものといえるが、日本文化の中には本来この共生関係がおのずと諸相に表出されている。

以上の前置きの後氏は、

- (1) 文明と文化
- (2) 「日本文化」の風土的基盤
- (3) 日本の風土的特性と衣食住
- (4) 西洋の自然観とエコロジー
- (5) 日本文化における自然との交流
- (6) 内外人の見た日本文化
- (7) ドナルド・キーンの見た日本文化
- (8) 外国人学生の見た日本文化の特質
- (9) 結語—日本文化と生存科学

の各項につき説明し、資源と労働力を技術と経済システムで取り結ぶ工業化社会は、自然と人間とからなる生存システムのサブシステムに過ぎない。環境破壊から廃棄の限度があり、消費の仕方、生産の仕方を考えなければならなくなった。零成長の可能性を考えるのが生存科学である、と結んだ。

なお、当日の報告の詳細は、研究誌『生存科学』次号に発表される予定。

会員研究会「生死と生存」第7回
クロヤマアリの生態と社会生物学

9月4日(土)、京都市の法蔵館において研究会が開催され、株式会社サイテック代表取締役・京都産業大学非常勤講師、北村省一氏が、表記のテーマで発表した。

氏は、人間に対する比較行動学的関心からアリの「社会性」に注目し、クロヤマアリを主に観察対象として研究してきた。

まず、アリのコロニー形成、活動期などの

生態については、昼夜や温度等の条件によって異なることや、採餌活動については、働きアリが体長5mmになるクロヤマアリの個体にマークをつけるという個体識別の方法を用いて、餌の場所についての情報伝達のあり方を明らかにしたことを述べ、また、クロヤマアリの女王バチの産卵行動については、実験的手法を用いて、その産卵パターンが巣に卵があるかないかによって影響されることから、産卵のプログラムがあることを明らかにしたことを述べた。

以上のようなアリの研究をふまえて、最後に、人間に対する比較行動学的研究の意義に触れ、人間に特有と思われていた利他的行動や乳児・幼児の行動なども、人間行動の生得的解発機構の研究によって明らかにされる可能性を示唆した。

討論では、人間の行動や文化に対する比較行動学や社会生物学の研究の意義についての問題点が指摘され、植物から動物へと移行してきた本研究のテーマの方向性にとって有意義な議論がなされた。

第2回「人間・情報・秩序」研究会
情報の共有

10月12日(火)午後6時より、第2回「人間・情報・秩序」研究会において慶応義塾大学環境情報学部教授石井威望氏が、表記のテーマで発表した。

氏は、情報には、社会的・国際的、企業・グループ、個体の各レベルがあるとし、発展途上国におけるテレビの普及、衛星放送による国外への電波の到達、企業内でのパソコンのネットワーク化、母子間さらには遺伝子レベルでの情報の共有等、夫々のレベルにおける情報の共有現象を紹介。情報には学習効果もあり、情報の共有は一見カオスに陥るように思えるが、必ずしもそうではないとし、フラクタル効果から情報の共有化を構造的に説明した。

なお第1回には、金沢工業大学教授、場の

研究所所長清水博氏が、自己組織化、脳の情報処理、意識と西田哲学、場の理論等について話題を提供し、討議が行われた。

第1回「科学技術・生存・評価」
研究会
肝属郡田代町における癌検診の評価

10月21日(木)午後2時より、研究所へ肝属郡医師会病院今隈院長、佐多町在住の浜畑先生を招き、表記研究会が開催された。

まず、委員長の筑井甚吉副理事長が、今の社会は市場経済の勝利として全てが金銭で評価されるが、本当は将来の資源・環境も考え将来の生存の立場から評価しなければならない、医療を「生存財」としてとらえ具体的な評価をしたいと述べた。

次いで浜畑先生が、佐多町で肝属郡医師会とともに永年にわたり展開してきた各種の検診、特に癌検診のデータとその成果を中心に発表。特に胃癌については、病院受診による発見と、検診による発見患者の夫々について、癌の進行度、予後、その患者にかかった医療費等を比較し、検診による早期発見の優位性を明確にし、さらにこれらのデータから、今後の検診の重点戦略とその進め方についての考えを説明した。また、佐多町における検診の普及のための地域ぐるみでの徹底した取組についても、特に保健婦の活動等の具体的な説明がなされ、医師会と行政と住民の協力の重要性が強調された。

第8回東西の健康観・医・薬研究会
伝統医学研究の方法

8月11日(水)正午より表記のテーマで日本赤十字看護大学非常勤講師高橋暁正委員が「推計学の医学への導入」と題し、ペンシルベニア大学歴史・科学社会学教授ネイサン・セビン氏が「医学研究方法論の近年の動き」と題し報告した。

高橋氏は、戦前のtop down型の医学教育に

疑問を感じながら医師となった後、推計学に出会った。その習得で権威主義的な学説は容易に否定されたが、一方では、日本の医療体制ではこの方法論は“危険”なものでもあり、それを身に着けた人の一生をも左右した。この手法により多くの治療法の有効性が確立していないことが明かとなった。西洋医学のみならず東洋医学についても然りで、無作為化割り付けや盲検法を用いた近代的评价法によってのみ、その有用性は確立されるが、現状はそれにほど遠い、とされた。

セビン氏は、現在の、医学が科学であり、医師の知識を中心として、病院は検査の中心といった見方は、歴史的に見れば「近代」というある特定の時代のものである、とし、“病い”は社会的、宗教的、政治的な“かたより”であり、“病む”ことは一定の社会的意味を付与された。近年、近代的な“医学”から、“ヘルス・ケア・デリバリー”という見方へと変化し、自己治療、家庭における医療、民間医学、さらには代替医学なども含めた全体像を見るべきと考えられ、医師の知識としての“病気”ではなく、患者にとっての“病”“苦しみ”が重要視されつつある、と述べた。

別府市・生存科学研究所主催
まちづくりシンポジウム
「人間性回復都市
“べっぶ”への展開」

9月25日(土)午後2時より、大分県別府市役所内のレセプションホールにおいて、表記シンポジウムが(財)日本船舶振興会後援で開催された。これは生存研と別府市との共同研究「別府市の総合調査研究」の一環として行われ、より健康で心が和む、人間性回復都市“べっぶ”の考え方と実現の仕方を市民とともに話し合うためのものである。

まず、中村太郎別府市長が「住民志向の政策立案とその実行を目指して」と題して挨拶を述べ、生存研を紹介し、総合科学的まちづ

くりを縁に始まる別府市と生存研との出会いを披露した。

シンポジウム第1席は、小平敦生存科学研究所専務理事が「生存の視点からのまちづくりと住民参加」と題して講演。演者は、宇宙のなかの人間としての自覚とその責任を考えながら、住民が自分で作った自治体の力で、未来を担う子供達のために、次の時代の新しい文化を計画的に作ろうと述べた。

第2席は、小林登国立小児病院院長（生存研副理事長）の「こども・家庭と豊かなまちづくり」。演者は、子供は生れながらにして育つ力（プログラム）を持っている。それをうまく動かすためには“やさしさ”が必要であり、地域社会・家庭を人間性豊かにすることが大切である、と指摘した。

第3席は、松原純子東大医学部助教授の「市民生活における健康リスクとその対応」。演者は、来世紀の人口の暗い予測は環境劣化のためである。健康リスクも増大するであろう。健康なまちづくりへの科学的対応は可能だが、自分自身という個としてリスクに備えることも必要である。環境は育てるものである、と強調しながら、種々のリスクとそれへの対応を論じた。

平成5年度第1回医薬問題研究会

9月27日（月）午後2時より表記の研究会が粕谷豊委員長を座長として開催され、医薬品の評価体制・開発機能等を論じてきたこれまでの研究成果を小冊子にまとめることが決り、今年度は、より適正な使用のためのチェック機能やそのための評価等の問題を検討することが議論された。

医療費の構造的分析（仮称）研究会

10月14日（木）午後6時より、向山定孝氏を委員長として会合が持たれ、アメリカの医療費の高騰、企業負担の増加と、それが日米経済摩擦との関連で議論されるであろう

ことを予測し、またアメリカの医療を後追いつている日本の医療費の将来を考えるために、医療のあり方と医療費を構造的に分析・検討するための研究会の準備が行われた。

公益信託武見記念生存科学研究基金 運営委員会

10月4日（月）、公益信託武見記念生存科学研究基金運営委員会が開催され、武見記念賞の受賞者の選考と、武見フェローへの助成の協議がなされた。

武見記念賞受賞者は、今年度から運営委員会が直接選考することになっており、運営委員会で協議の結果、6名の候補者の中から、財団法人保健会館理事長国井長次郎氏が受賞者に選ばれた。授賞式は12月19日（土）に行われる。

また、武見フェローへの助成については、その予算を、今年度の武見フェローとして推薦されていた松田正己氏が、生存研フェローとして研究に派遣されるための支出に当てられることが了承された。

忌報

10月15日、武見記念生存科学研究基金顧問、ハワイ大学名誉教授、渡辺慧先生がご逝去されました。永年にわたる生存研へのご指導を感謝し、心からご冥福をお祈り申し上げます。

研究所日報

9/17・金 別府市総合調査研究委員会
10/12・火 別府市総合調査研究委員会
10/16・土 バイオサナトロジー学会
同 川崎病研究委員会（盛岡）
10/25・月 別府市総合調査研究委員会
10/29・金 肝属郡医師会黒木会長来所